

息ぬきスポットをつくる人

ゆるく、つながる場は、
クリエイティブなアイデアが
生まれて、形になるところ。

新居浜市初のコワーキングスペースは、
仕事に集中するだけでなく、
気軽に話せて息抜きもできる雰囲気。
それは、人とゆるくつながりながら、
新しいアイデアを実現させていく、
そんな場所でありたいから。
クリエイターとして築いた場は、
十分な手応えを得て、
2021年、新たな挑戦が始まる。

黒島海浜公園は、柳川あこさんの
推し息抜きスポット。市内には公園
が多く、子どもと楽しめる。「子ども
にとってその場にあるフィールドが
おもちゃ。お金もかからない」

子連れOKとしていて、赤ちゃん連れのママさんには便利なソファ。そんなママさんにとっての息抜きスポットでもある。



「コンセプトは、ゆるく、つながる」

コワーキングスペースは、柳川さんが代表を務める株式会社ミカワークスの事務所も兼ねている。オフィスというよりも、部屋にお邪魔したようなアットホームな雰囲気。ふと生まれたアイデアを柳川さんに話しかけやすい距離感だ。



息抜きスポットをつくる人
②

コワーキングスペース新居浜びず

柳川あこさん

やながわ・あこ

フリーランスのクリエイティブディレクターであり、市内で「コワーキングスペース新居浜びず」を運営している柳川あこさん。仕事のアイデアが行き詰まった時や、冷静に落ち着こうという時に、ふらりと訪れているという黒島海浜公園はお勤めの息抜きスポットだ。新居浜市には公園が数多く存在し、海と山の自然を満喫できるのも魅力の一つ。ショッピングセンターもあり、子どもを好きなイベントに連れて行ったり、人の行動を観察できて、仕事のアイデアにも生きている。どちらも車で数十分のアクセスで、クリエイティブと子育てとの両方に必要な場だ。

柳川さんのクリエイティブの拠点「コワーキングスペース新居浜びず」は、新居浜市港町にある（2021年3月現在）。「ゆるく、つながる」がコンセプト。ふらりと立ち寄って、利用者同士で悩みやアイデアを気軽に話したり、そこから人がつながって新しいことが生まれる、そんな場づくりを大切にしている。

そのために、カフェではないこと、仕事や勉強、読書、パソコン作業、充電などのために自由に過ごせる場であることを明確に発信している。空間も工夫されていて、仕事に集中しつつも、ふとした時に、話しかけやすい距離感だ。傍にはソファがあり、気分転換を図ることも可能。自分たちでDIYして壁や天井を塗り、棚を作ったことも、アットホームな雰囲気につながっている。そんな居心地の良さなのか、フリーランスの人だけでなく、学生や赤ちゃんを連れたママさんなど、様々な人が訪れる。

「喋るだけでも楽しいし、ここで本を読むだけでもいい。家族以外のコミュニティができたとか、仕事をもらえたみたいな話が聞けて嬉しい」

「発信」という武器を磨いて生まれたリアルな場

2016年に大阪から新居浜市に移住した柳川さん。前職では、大阪のゲーム会社でディレクターとして多忙な日々を送っていた。結婚を機に、自分の仕事は場所を選ばないこと、いずれは子育てでワークライフバランスが変わることを考えて、ご主人の故郷・新居浜を選択。移住した年に独立し、ゲームのプランニングやウェブサイトの制作等の仕事をしている。「私が仕事を取ってくるから」と頼もしい柳川さんだが、移住した当初は、「コネなし、知り合いなし。ゼロからゲームを始める気分だった」と当時の気持ちを語る。

「出勤した夫が帰るまで、コンビニで『ありがとう』しか言っていないぞって気付いた時、さすがにやばいと思いました」

そんな寂しさを発散したいと始めたのが、地域情報サイト「新居浜びず」。サイトを立ち上げ、新居浜を中心としたグルメやイベント情報などを柳川さんの独自の視点と文体で紹介。さらに、実現させたいアイデアもオープンに綴っていく。インプットした情報や考えを整理してアウトプットすることは、柳川さんがこの地で心地よく呼吸するためのポジティブな発散であったのかもしれない。

昭和の雰囲気は残しつつ、
生まれ変わる姿を
乞うご期待！



新居浜で第一号のコワーキングスペース「新居浜びず」。2021年5月に、喜光地町の築約50年の空き店舗に移転予定だ。元・和楽器屋の二階建ての建物は、現役時は、和楽器の教室で生徒が集まる場所だったそうだ。そんな歴史を踏まえながら、人が集える新たな場として生まれ変わる。1階にはワイワイできるスペースを、2階に集中できる個室スペースや会議室を設置予定だ。

この物件を見て、「ビジネス的に、ああもうここやわ」と感じた柳川さん。面する長田通りは歩き遍路の通り道のため、国内だけでなく海外の人とも交流したり物販を手にとってもらえる可能性がある。また、住宅の分譲が進むエリアでもあり、保育園も近く、若い子育て世代が多い。そのため、シェアキッチンをつくり、パンやお惣菜を販売すれば、子どもの送り迎えの途中で購入してくれたり、スキルのあるママさんがシェアキッチンを運営する仲間になることも考えられる。

特筆すべきは、1階に併設する工作室。活版印刷機、3Dプリンター、布プリンター、レーザー加工機、ポスターが出力できるプリンター、シルクスクリーン製版機などを設置予定だ。ここで生み出された作品は、併設する「一箱のデパート」で販売できる仕組みも考えている。「地方はデザインの地位がまだまだ低い。つくるものに対する価値を上げていきたいです」

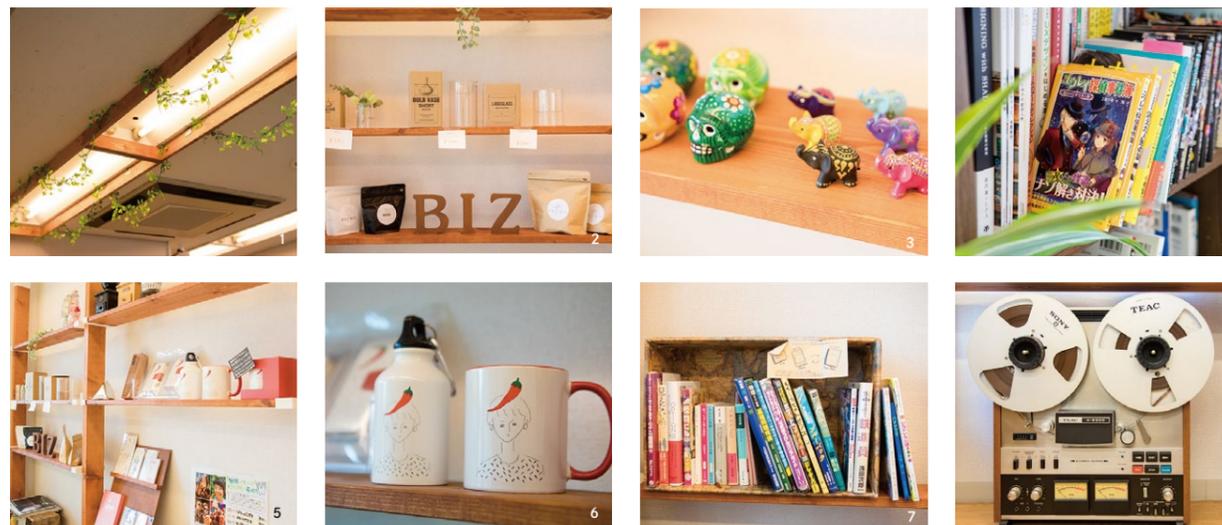
これだけ設備が整うと、新たな仕事生まれそう。「ゆくゆくはギルドボードみたいなことがしたいんです。この仕事できますとか、こんな仕事をできる人が欲しいとかを貼り出して、マッチングするような」と語る柳川さんのアイデアは尽きることがない。

息抜きできて気軽に語れる居心地の良さはそのままに、一歩踏み出したい人の背中を押してくれる、クリエイティブを育てる場として期待される。

商店街の近くの元和楽器屋さんが、
クリエイティブの発信基地に



コワーキングスペース新居浜びず
愛媛県新居浜市港町 3-211 港町ビル 1F
営業日：月・水・金
営業時間：10:00-16:00
<https://niihama.biz/>
※2021年5月に移転予定。詳細は「新居浜びず」のサイトをご覧ください。



1_ 蛍光灯に木枠をつけてフェイクグリーンを飾ったことで、無機質ではなくあたたかみのある空間に。 2_ 西条市の酒井屋珈琲とコラボしたオリジナルのブレンドコーヒー。昭和、平成、令和をイメージした3種。 3_ 世界を旅している利用者の方が集めたカラフルな雑貨を販売。 4_ 児童文学作家の上田千尋さんがスタッフとして加わる。子ども向けのイベントや制作物をつくる時の強力な味方だ。 5_ 図面を描けるご主人が制作した棚。ご主人は、柳川さんのアイデアを応援してくれる良き理解者だ。棚では、柳川さんがセレクトしたもののクリエイターの作品を販売。 6_ 新居浜を拠点にスパイシーな料理を食べ歩く、「にいほまスパイスガールズ」のオリジナルグッズ。 7_ 本の物々交換「旅する本」の棚。以前の持ち主のメッセージが添えられている。 8_ 譲り受けた古いテープレコーダー。ディスプレイとしても存在感があるが、実際に聞けるそうだ。

そんな柳川さんのユニークな発信に、着実に読者が増えていく。読者とリアルに交流できる場が欲しい、自分の仕事場も持たいたいという思いが次第に強くなり、思い描いた形がコワーキングスペースであった。そこで四国の情報を記事にしたり、自分もそんな空間を作りたいと発信しながら動き始めた。新居浜では、まだその言葉自体が知られておらず、一から説明しなければならぬ場面もあった。そんな驚きも含めて、物件の購入や天井を塗ったことを発信していたら、手伝わせてほしいという人たちが現れ、DIYの作業を手伝ってくれることに。そんな場所ができた嬉しいから開店祝いと称して、物資を提供してくれた人もいた。「なんか助けてもらっている感じがいろいろあって、大事にせんとあつて。愛媛ってそういう助け合う感じなんでしょうかね。特に新居浜は大企業があつて、人の出入りが常にあるので、地元と余所者の分け隔て感がない。心地よいというか新居浜で良かったというのがありますね」

人がつながり 新たなコトが生まれる場に

2019年7月にオープン。徐々に県外からの利用も増えていく。「みんな自分で調べる力があつたり、情報発信力を持っていたり、能力を持つ人が多くて、ここはそんな人たちをつなぐ役割にもなっています」

ここで出会った人たち同士で「にいほま一箱古本市」というイベントも生まれた。

また、市内の施設を巡り、昔話を集めるスタンラリー「ハマモンクレスト」という市の委託事業も手がけた。

「新居浜には昔話がめっちゃあるんですよ。でも子どもたちは、みんな知らずに市外に出てしまう。だから、キャラクターを作って、昔話を知ってもらえたらなあって。それをここで知りあった人たちに話したら、じゃあやるうってなつた」

自分のアイデアを形にしたり、誰かの相談には心当たりのある人を紹介したり、アイデアを実現させる場となった。そんな思い出の詰まった場所の移転を決意。「ワイワイする場所としてはすごく機能したんですけど、一人で作業に集中したい人には不向きだなあつて思っていたんです。もともと、小さく始めて軌道に乗ったら大きいところに移ろうと思っていたら、たまたま良い物件に出会って」

その物件は2階建ての空き店舗で、活用にも夢が膨らむ（13ページ）。しかし、リスクも伴う。「失敗したらどうしようとか確かに思うんですけど、最悪どこかで働けば返せるくらいの返済額にしておくとか、ここまでになったら撤退しようみたいな判断基準はつくっているかもしれないですわ。それまでは大丈夫だから進む」という、迷いのない答えが返ってきた。

ゲームに例えるなら、武器を磨き、城を築き、共感できる仲間を増やしてきた柳川さん。これから新たな地で築く城も、ゆるくつながり、生まれたアイデアを実現させながら進んでいくのだろう。柳川さんの物語は続く。